# 闇の中の妖怪・妖怪の中の闇

ラルカ　ニコラエ

日本語には、「闇」に関する言葉がたくさんある。全く暗い時を、「暗闇・暗黒・真っ暗・真っ暗闇」、光が弱くて、少し暗い状態を、「小暗い・薄暗い・仄暗い」などという。ただし、「暗い」は「昏い」「冥い」とも書く。

『漢字源』で「暗」と「闇」を調べると、両方に「音」という部首が付いていることが分かる[1]。暗黒からメッセージがあるのだろうかと考えられる。あるいは闇に隠れている妖怪たちが何かを言おうとしているのではないか。ラテン語の monstrum（怪物）は monere に由来する。monere[2] は「警告する」、または「教える」「指示する」「指図する」「説明する」などを意味するという[3]。中世ヨーロッパでは、そういった怪物は何かの前兆、予兆であると解釈された[4]。暗闇では、視覚を利用できず、他の感覚が中心になる。日本の悪霊祓いの一方法では、験者（げんざ）の脇に「依坐（よりまし）」を用意する。病人に憑いている悪霊を依坐に引き移し、彼の口を借りて病気の原因などを語らせる。怨霊・妖怪の姿は人々の目には見えないので、声（音）でしか示現できない[5]。つまり、闇の世界では視覚より聴覚の方が重要になってくるに違いない。例えば、砂かけ婆というお化けがいる。人淋しい森や神社の陰を通る人に砂をばら撒いて驚かすと言われているが、婆の姿を見た人はいない[6]。

言語学の話に戻ろう。国語辞典で「暗い」という言葉を引くと、次のような説明がある。

---

1 暗の解字：言の字の口中に印を加えた会意文字で、ものをいう口の中に何かを含んで口ごもるさま。諳（アン）（口ごもって明白に発音せず、頭の中で覚える）のもとになる字。暗は（日＋音符 / 音）で、中に閉じこもって日光のささないこと。闇の解字：「門＋音／音符」口を閉じて声だけを出す。ふさぐ。出入り口を閉じて、中を暗くふさぐこと（藤堂明保『漢字源』学研、1994 年、620、1414 頁を参照）。

2 同じ動詞から英語の demonstrate（証明する、論証する、証拠となる、明らかに示す）が生まれた。

3 Stephen T. Asma. *On monsters*. Oxford University Press, 2009, p. 13.

4 同上。

5 小松和彦『妖怪文化入門』せりか書房、2007 年、68 頁。

6 澤田四郎「大和昔譚」『奈良文化』21 号（1931 年）、103 頁。

| 『広辞苑』 | 『大辞泉』 | 『大辞林』 |
|---|---|---|
| 1．**光がささない**、またはさし方が不十分な状態である。<br>2．くもって**はっきりしない。ぼんやりしている**。色がくすんでいる。 | 1．光が弱い。光が少なくて、物が**よく見えない**。<br>2．色彩が黒みがかった感じである。くすんでいる。 | 1．光の量が少なく，物がよく見えない状態である。明るさが足りない。<br>2．色がくすんでいる。黒ずんでいる。 |
| 3．**陰気である**。晴々しない。不明朗である。 | 3．気持ちが**晴れ晴れせず、沈み込んでいる**。また、人にそのような印象を与えるさま。<br>4．不幸な感じである。また、人に触れられたくない事情がある。<br>5．その事について希望がもてない。期待できない。 | 3．（性格や気分が）陰気で晴れやかでない。明朗でない。<br>4．犯罪・不幸・悲惨の存在を感じさせる。<br>5．希望がもてない状態だ。 |
| 4．物事に**通じていない**。 | 6．その方面・分野のことに**知識が乏しい**。不案内である。 | 6．事情をよく知らない。精通していない。 |
| 5．物を弁別する智力がない。暗愚である。 | 7．物事を判断する能力がない。愚かである。 | 7．愚かだ。暗愚だ。 |
| 6．世の中が開けていない。 | 8．文化がまだ発達していない。未開である。 | |
| 7．不満足、不足である。 | 9．不足している。不十分である。 | 8．不十分である。不足している。 |

**表1**

『広辞苑』などに出てくる「闇」の定義と同じように、妖怪の体からは**光がささない**。光がまぶしいどころか、逆に妖怪の体の中からは闇が放たれていると言えるだろう。妖怪の体は合体していて、各部が普通より多かったり[7]、少なかったりするので[8]、あまり**はっきりしない存在**となる。それゆえに、**顔形などがよく見えない**かもしれない。すると、人間は妖怪について**知識が乏しい**ため、知っているものやことに近似[9]させようとする[10]。そして、境界を超えた妖怪に出会うと、やはり**陰気な**

7　目目連；二口女。

8　一つ目小僧。

9　「ここでは＜幽霊の正体見たり枯れ尾花＞という有名な川柳を使って説明してみましょう。ある月夜の晩に、寂しい道を一人で歩いていた。ふと脇をみると、黒い影が動いているのが目に入りました。その人はびっくりして＜さて幽霊が出たか＞と思って逃げ出そうと思ったが、気を落ち着けてしっかりその影を見ると、枯れた尾花が風に揺れ動いているだけでした。（中略）この人は月明かりだけの夜の闇のなかに黒い影を認めたとき、それを彼が持っている知識のなかでも＜信仰的知識＞にとっさに照らして説明しようとしたのです。つまり、＜黒い影＞は＜怪異・妖怪現象＞と判断され、その正体は＜幽霊＞ということになったわけです。そのまま、この人がその場から逃げ出したならば、きっとこの体験はずっと＜幽霊に遭遇した体験＞ということになったでしょう。最初から最後まで＜信仰的知識＞によって説明するわけです。しかし、幽霊が出たと一瞬判断したものの、ほんとうに幽霊なのかを確かめようとすると気持ちが生じ、おそるおそるその影の方に近づいてよく見ると、枯れ尾花が風に揺れていた。この第二段階では、＜科学的知識＞＜道具的知識＞が改めて動員されて、その知識の範囲内で、この現象は説明されることになったのです。すなわち、当初は＜怪異・妖怪現象＞として把握された＜黒い影＞は、情報のフィードバックによって＜怪異・妖怪現象ではない＞というふうに訂正されます」（小松和彦『妖怪文化入門』、32-33頁）。

10　例えば、泣き声が鵺（ぬえ）（鳥）の鳴き声と似ているので、同じように泣く妖怪も鵺になってしまった。

**気分**になり、**気が沈むだろう**。ここで言いたいのは、妖怪と闇の特徴は非常に似ているということである。

「夜」の類似語は数えきれないほど多い。例えば、「夕方・夕・晩・（真）夜中・深夜・丑の刻・宵・黄昏・昏・日没・暮れ・薄明・薄暮・夕暮れ・日暮れ・未明」などがある。「逢魔時（大禍時）」は、薄暗くなる夕方、昼と夜の移り変わりを意味し、幽霊や妖怪が出やすくなる時刻を指している。主として、**日中と夜分の境**、**一日の残照が山の端に消えかかり**、**空はほの明るく地上はほの昏い**、**明暗**の交錯した、妖しいたそがれ時であるという。このひとときは、地上の物象の姿が茫と浮き上がったようになってはっきりと見定められず、視覚からくる不安定さが心の不安をも伴うためか、昔から「**逢魔が時**」といわれ、諸々の怪しげなものどもがはびこり、歩き回る時刻として恐れられていた。この時刻に淋しい道で人が行き会った場合、知る知らぬにかかわらず、お互いの警戒心をなくすために、挨拶を交わすのがしきたりとされていた[11]。闇が不安定さを強調するため、人は昔から**夜になる**と外出しなかった。**闇の中**に妖怪がいて、病気を植え付けるからである[12]。

夕方、妖怪の姿は闇から抜け出して、人の前に現れる。仙台市小田原の一角に蜂谷屋敷と呼ばれる地域がある。そこは元、蜂谷長者といわれた蜂谷定国の屋敷で、藩政時代はその一角に栗の古木があった。**夜になる**と、老樹の下に振袖姿の白い顔の女が佇んで、小路を通る人にニタニタ笑いかけたといわれ、小路は、**夕方になる**と通行が途絶えてしまった。それを聞いた剣客、狭川新三郎が**夕方に**出かけると、やはり怪しい振袖姿の女がニタニタ笑いかけた。新三郎が小柄を投げつけると、キャッと声を立て手応えがあり、女の姿は闇に消えた。翌朝調べると、劫を経た古狸が咽喉を刺されて死んでおり、それ以来妖異は絶えて、誰ともなく袖振丁と呼ぶようになった。その後、誰が建てたのか、屋敷内に狸塚とよばれる小祠ができ、明治の頃まで残っていたという。一説には、この通りの屈折した形が振袖に似ているからともいわれる[13]。

「老婆に化けた大蝦蟇（おおがま）」によれば、光と闇の比例は、妖怪の正体と関係しているそうである。妖怪を撃っても、行灯の火が消えるだけだが、逆に行灯の火を撃つと、妖怪が死んだとされる。昔、名木沢の谷川の土橋の辺に、一軒のあばら屋があった。**夜になると**行灯の下で一人の老婆が糸を紡いでおり、魔性のものに違いないという評判であった。鉄砲の名人紋兵衛が、**ある夜**、銃を携えて様子を見に行った。土橋の辺まで行ったが、振り向いてニタッと笑った老婆の顔が物凄い。紋兵衛は老婆の胸元めがけて銃を撃ち放したが、行灯の光が消えただけで何の手応えもなく、**真っ暗になったので**逃げ帰ってきた。**翌晩**も行ってみると、やはり同じように老婆が糸

[11] C0411109-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C0411109-000.shtml
[12] 高橋敏弘「怪異雑考（六）」『西郊民俗』130 号（1990 年）、30–32 頁。
[13] C0411169-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C0411169-000.shtml

を紡いでいた。古老に相談したところ、それは魔性のものに違いなく、行灯の火を狙えば射止めることができると教えてくれた。そこで三日目の夜、老婆が振り向いた瞬間に行灯の火を狙って撃つと、ギャッという異様な叫びとガラガラという音がして辺りは真っ暗闇になった。翌朝行ってみると、それは三尺余の醜い大蝦蟇であった[14]。

泥田坊（どろたぼう）はあの世の闇からこの世の夜に亡命してしまった妖怪で、『今昔百鬼拾遺』に登場する。昔、北国に住む老人が、息子のために少しも休まずに畑を耕していた。ところが、ちょうど米の収穫の頃に急死してしまう。息子は親と違って、農業を継ぐどころか、酒ばかり飲んで遊びふけっていて、しばらくすると、田を売ってしまった。ある夜、田を手に入れた地主が見回っていると、突然泥田の中から坊主頭に一つ目で、三本指を持つ全身真っ黒の老人が現れ、「田を返せ、田を返せ」と言って、泥を投げつけたという[15]。

いたずらが好きな枕小僧（まくらこぞう）も、夜中、人が寝ている間に現れる。子どものような姿をし、よく座敷童や座敷小僧と間違えられる。枕をひっくり返したり、金縛りに合わせたりする妖怪である。神社やお寺に関係する建物の一室に出没するようである。静岡県の伝説によると、枕小僧は三尺にも満たず、人が部屋で寝ている時に現れ、いたずらをしているそうである[16]。枕を北枕にして、人を死に向かわせるという。

寝静まった夜に出現する妖怪の中には、垢嘗（あかなめ）もいる。この妖怪は風呂の垢を長い舌で嘗めるとされる。古典の妖怪画の画図では、足に鉤爪を持つ、ざんぎり頭の童子が、風呂場のそばで長い舌を出した姿で描かれている[17]。江戸時代の怪談本『古今百物語評判』には「垢ねぶり」という妖怪の記述があり、垢嘗はこの垢ねぶりを描いたものと推測されている[18]。

ろくろ首は首が長く伸びる妖怪である。夜ごと美しい娘が首をどんどん伸ばし、屏風や鴨居を越えて行燈の油を嘗めるのは一つの典型的なタイプで、もう一つ、頭が完全に胴体から離れ、飛行するタイプ（飛頭蛮）もある。ろくろ首にせよ、飛頭蛮にせよ、本人が寝ている間に無意識に飛行する話が多いので、魂が抜ける現象の具体化だとする見解もある。首を伸ばさない限り、容姿は人間と変わらないので、ろくろ首は人間が罹（かか）る奇病とされることが多い[19]。要するに、昼間は人間の姿であるが、夜は妖怪（ろくろ首）となる[20]。

ろくろ首と同じように、昼間の態度と夜の行動がまったく違う人物が、ルーマニ

---

14　C0411319-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C0411319-000.shtml
15　志村有弘編『日本ミステリアス妖怪・怪異・怪人事典』勉誠出版、2011 年、69 頁。
16　小松和彦監修『日本怪異妖怪大辞典』東京堂出版、2013 年、516 頁。
17　草野巧『幻想動物事典』新紀元社、1997 年、7 頁。
18　村上健司編『妖怪事典』毎日新聞社、2000 年、7 頁。
19　小松和彦監修『日本怪異妖怪大辞典』、611 頁。
20　同上。

アの伝説や民話にも見られる。それは、「ストリゴイ」（strigoi、revenant[21]）と呼ばれる。生きている人でも死んだ人でもストリゴイになれる。例えば、大網膜を頭に覆う赤ん坊はストリゴイになる可能性が高い。また、毛の生えたしっぽを持つ赤ん坊も、大きくなってからストリゴイに変身する。ストリゴイは背が高く、目が赤くて、爪が長い。時々、馬のような蹄を持つ。昼間は普通の人間のように作業をしているが、夜寝ている間に魂が体を出て、他のストリゴイに会いに行く。女性のストリゴイは「ストリゴアイチェ」（strigoaice）といい、子どもを殺したり血を吸ったり、人を離婚させたり、畑の植物の精気を奪ったりするので、男性のストリゴイよりずっと悪い。人が死んだ後、魂が墓から出られないように、つまりストリゴイにならないように、心臓に杭を打つ。ストリゴイは犬や狼に化けることもある。死んでから 9 日間か 6 週間ぐらい経つと、ストリゴイは墓を出て、夜中から夜明けまで歩き回る。特に、聖アンデレの夜（11 月 30 日）はストリゴイが出やすい。その日は村境に集まって、空中で踊ったりするそうである[22]。ストリゴイには、恨み・嫉み・愛欲などの気持ちが感じられ、幽霊と似ている点がある。他方、魂ではなく体を持つ人物なので、ゾンビとも類似点があるが、ゾンビには人間らしい気持ちを感じない。

『ベオウルフ』の叙事詩の第一部では、グレンデルという怪物が夜な夜なヘオロットの城を襲う。その噂を聞いた勇士ベオウルフは、デンマークにある城を訪れる。深夜にグレンデルが襲撃してきて、ベオウルフと一騎打ちになる。ベオウルフはグレンデルの腕をもぎとるが、怪物はそのまま逃げていく。翌晩、グレンデルの母親が自分の子の復讐にやって来る。家臣を殺されたフロースガール王はベオウルフに怪物を退治するように依頼し、ベオウルフは怪物の沼（湖の底）にある棲家に赴く。そこで、勇士と怪物の格闘戦が繰り広げられるのである。よく見ると、二匹の怪物はそれぞれ違う闇の中に出現する。グレンデルはよく深夜に現れ、時間的な闇に結びついている一方、その母親は沼に棲んでいるので、空間的な闇に隠れていると言えるだろう。つまり、『ベオウルフ』に登場する怪物には、空間の闇と時間の闇があることが明らかになる。空間的な闇と言えば、お墓、暗い道や森、竹やぶ、暗い中山などが頭に浮かぶ。幽霊は生前の怨みをはらすために出るものだとされており、そういった所によく現れるそうである。

森は昼間と夜が区別しにくい場所なので、様々な妖怪が森の中に棲んでいる。昔は金蔵寺のあたりは**木が繁り昼でも暗い場所だった**。そこにはツルベ落しがいて、木にぶら下がって上からつまみに来るといわれていた。子どもは怖がって上着をかぶって通り抜け、親はよく「ツルベ落しが来るぞ」と脅かして叱った[23]。ロバート・

---

21 中国のキョンシー（殭屍）と似ている。

22 cf. Ion-Aurel Candrea. *Foclorul medical român comparat* [ルーマニアの比較医療民俗学]. Polirom, 1999, pp. 174–75.

23 2366058 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/2366058.shtml

ホールドストック（Robert Holdstock）によって書かれた『ミサゴの森』という小説では、二人の兄弟が、亡くなった父の日記から、周りの森に不思議な力があることを知る。森には神話時代の時間が流れ、古代・中世の生き物や人々が棲んでいる。また、森は、人の想念を実体化して肉体を与える。このように発生した人間は、「ミサゴ」と呼ばれている[24]。

空間的な闇は横軸に限らず、縦軸への移動にも発生する。例えば、地下や海底への旅は、闇への旅にもなると言える。海女が海に潜って行くと、もう一人の海女がおり、鮑をくれて寄こしたり、**暗い中へ誘い込もうとすることがある**。もし、本物の海女だと信じて鮑を貰ったり誘い込まれたりすると、潜水時間が延びて窒息死してしまう。これを「ともかづき」という[25]。

さて、竜宮まで旅をしてきた最も有名な人物といえば、浦島太郎と甲賀三郎である。昔、蓼科のすえの村に、甲賀太郎、二郎、三郎という三人の兄弟がいた。三郎の嫁が美しいのを嫉んだ兄たちは、三郎を蓼科山の頂にある岩穴に連れ出し、竜宮まで繋がっているから入ってみようと言って三郎を先に入れ、騙して穴に落としてしまう。気がつくと、三郎は竜宮の御殿に寝かされていた。そこには食べ物がたくさんあり、庭には一年中花が咲いていた。三郎は竜宮に 13 年間滞在した[26]。竜宮で暮らしている間、甲賀三郎は妻のことが頭から離れず、ついに竜宮の人々の制止を振り切って地上に帰ってきた。**闇を抜ける**と、そこは浅間山の麓にある真楽寺の池であった。三郎は自分がながむし（蛇）の姿になっている事に気づいて嘆き、蓼科山の頂上に立ち、妻の名を大声で呼んだ。すると、遠くの方から妻が自分を呼ぶ声がする。三郎は竜の姿で空に飛び上がり，諏訪湖の真ん中へ飛び込んだ。実は妻も竜になって湖の底に暮らしていたのである。二人は何時までも抱き合っていた[27]。地下の世界に近づくと、原則が変わるにつれて、感覚がおかしくなってくる。山中

[24] 「人の形をしたものがフェンスのそばにさっとあらわれた。それらは森林地帯の縁から湧きでるように渦を巻き、跳ねあがり、エニシダを燃やすときにたちのぼる煙にも似たその灰色の影のようなものは、現れたときと同じようにさっと消えた。木のあいだから、そして木の陰へと、なにものとも知らないものが手をさしのべ地面をなでまわし、さぐっている。（中略）にわかに空の光が失せ、あたりがぼうっとした灰色になった。木々は神秘的な霧に囲まれ、一条の不気味な光が、＜スティックルブルック＞のあたりの方角から射してきた。（中略）やがて精霊たちがぞろぞろ地面から現れ、僕のまわりにただよい、空中に浮かび、こちらを探り、笑い声みたいな奇妙な音を発している。僕は体をあちらこちらにひねっては、風に吹きとばされてきたようなこれらの生き物たちになにか現実的な形を見ようとする。ときどき顔や手や長い曲がった指や、こちらに突き出されるぴかぴか光るかぎ爪みたいな爪などがちらちら見えるのだが、触ろうとするとすうっと離れる。（中略）ほとんどは人間というよりどう見てもエルフィンみたいなしかめ面。流れるような髪の毛、きらきら光る目、無言の叫びをあげている大きな口。これはミサゴなのだろうか」（ロバート・ホールドストック『ミサゴの森』［小尾芙佐訳］、角川書店、1992 年、81–82 頁）。

[25] 岩田準一「志摩の蜑女作業の今昔」『島』、昭和 9 年前期号（1934 年）、87–88 頁。

[26] C2010316-001 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C2010316-001.shtml

[27] C2010316-002 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C2010316-002.shtml

に**深い穴**がいくつかあって、それらを「飢渇穴」と呼ぶ。穴を覗くと、飢えや渇きを感じるようになる[28]。J・R・R・トールキンの『ホビットの冒険』や『指輪物語』に登場するゴルム / ゴクリ（Gollum）も、山の洞穴の奥で長く孤独に暮らしていたので、精神を病み、二重人格的な行動をとるようになった。

一方、妖怪は自然の中だけに棲むものではない。人によって発展してきた文化にまで侵入してしまう。「納戸婆」は、**家の暗い納戸**にいる怪物である。納戸にいてホーッといって現れるが、庭箒でたたくと縁の下に逃げ込むといわれる。これとは別に、西日本の所々で納戸に神を祭る例が見られ、家の神の本来の形ではないかと考えられている。納戸婆はその俗信の崩れたものという[29]。さらに、**古い家の奥の暗い部屋**に出てくる妖怪の中には、「座敷童」もいるそうである。

現代でも、闇から新しい形をとった妖怪がどんどん生まれている。深夜に宇都宮城跡の**西の暗い道**を歩いていると、何もなかったはずの場所にジュースの自動販売機があった。ボタンを押すと、人間が階段から転がり落ちたような肉と骨の音がして、小さな指がたくさんついて動いている手が出てきたらしい。しかし、次の日に同じ場所に行ってみると、普通にジュースが売られていたという[30]。村上春樹の『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』では、「**やみくろ**」という生物が地下に生き、汚水を飲み、腐ったものを食べ、光の世界に住む人間たちを憎んでいる。

闇に孤独な妖怪もいるだろうが、群れをなして出現することもある。通常、百鬼夜行という言葉を使うと、たくさんの鬼やそれに類する異形のものたちが、行列を作って、夜の大路を移動していく様子を示す。そしてそのような様子を描いた絵巻が、「百鬼夜行絵巻」と呼ばれている[31]。『今昔物語集』[32] などから百鬼夜行の出没の仕方を見ると、都を夜中に群れをなして鬼たちが行進して歩くというものもあるが、人の住まなくなった荒れ寺や荒れた屋敷に泊まる人間の前に妖怪が次々に現れてくる、というのもある。『宇治拾遺物語』では、山の中に鬼たちがぞろぞろと現れて宴会を開く。このように百鬼夜行譚には、「都大路行進型」「化け物屋敷型」「山中出没型」の三つのタイプがあり、それぞれに絵画化されている[33]。国際日本文化研究センター所蔵の「百鬼の図」では、黒雲が三分の一ほどを占める。そこでは、逃げ遅れた妖怪たちの上にある巨大なシルエットが黒い煙を吐き出している。その煙は、要するに、妖怪の中にある**異常の闇**なのである。

黒雲自体が妖怪の体となることもある。洛陽（都）が**闇になった**ので占うと、阿

28 柳田國男「ひだる神のこと」『民族』1 巻 1 号（1925 年）、157 頁。
29 C0411063-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C0411063-000.shtml
30 久野俊彦「高校生が知っている不思議な話」『下野民俗』39 号（1999 年）、52 頁。
31 小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』集英社、2008 年、35 頁。
32 『今昔物語集』、巻 14 第 42 話。
33 小松和彦『百鬼夜行絵巻の謎』、13 頁。

蘇童（阿蘇大明神）が、唐から肥後国に渡って来ていることが判明する。そこで建部行世を勅使として派遣したが、**闇は晴れなかった**。次にその弟の神牙を遣わし、神牙が矢を射ると、周りは晴れていった[34]。元日の朝早く起きて東の空を眺めると、**黒雲が三叉に分かれて**立っているのを見ることがある。これは、鬼が、地上に門松が立っているのを見て恐れおののいている姿だと伝えられている[35]。弘法大師を中心とする伝説では、磐梯山に棲む「手長足長」には雲を集めて会津一帯を真っ暗にし、洪水や嵐を起こす力があった。この妖怪は農作物を荒らし、人を困らせたので、弘法大師がだまして小箱に閉じこめ、磐梯明神として祀ったという[36]。妖怪たちは気候にも影響を与えるそうである。諏訪神社の西方数町ほどにある経塚のそばの森には、一箇所、どんな夜でも必ず雨が降るといわれる場所がある。この一帯に雨が降る晩は、必ず化け物が出るという[37]。また、次の民話のように、天気に影響を与えるだけでなく、自分で黒雲や霧を作ることができる妖怪もいる。昔、梅雨が過ぎても雨がやまず、霧が濃い年があった。茅野の三階滝の上を旅僧が通りかかると、甲羅が１メートルもある大蟹が泡を吐き、**黒雲と霧を作っていた**。僧が印を結んで祈ると、蟹は滝壷に落ち、雲も晴れた。以来、三階滝の一番上を「かにだる」と呼ぶ[38]。

新潟県の「弥三郎婆」の伝説では、狼たちは木に登った弥三郎まで届かなかったので、弥三郎婆を呼んだ。すると西の方から黒い雲が現れて、中から太い手が出て、弥三郎の首筋を捕まえようとした[39]。もう一つの新潟県の伝説では、駄栗毛左京が主人の命で使いに行った。沢根まで来ると、急に空が曇って風が出始め、諏訪神社の森近くまで来ると雷が来て、何者かが馬をつかんで動かせない。後ざまに切ると、手ごたえがあった。そこに一丈余りもある鬼女が現れて、黒雲に乗って逃げ、あとには腕が残されていた。ある雨の晩、老女が訪ねてきて、自分は越後弥彦在の農夫弥三郎の母だといって許しを請い、以後は悪事を改めると誓いを立てたので、腕を返した。それ以来、弥三郎婆は二度と佐渡には姿を見せなかったという[40]。

異常の闇に関する一番よく知られている事例は、源頼政による鵺（ぬえ）退治の物語である。それは、『平家物語』および『源平盛衰記』の中で語られている。仁平（1151－54）の頃、丑の刻になると、東三条の森の方から黒雲が湧き出て紫宸殿の上を覆い、そのたびに天皇が恐怖に気を失うということがあった。高僧に命じて祈祷を行わせるものの効験なく、ついに頼政に怪物退治の命が下る。頼政は家来の井（猪）早太を伴い、黒雲の中の怪物目がけて矢を射かける。はたして手応えがあり、井早太が

34　村崎真智子「中世阿蘇社縁起伝承の展開（上）」『伝承文学研究』52 号（2002 年）、115 頁。
35　昇曙夢「島の思ひ出―（かけろま歳時記）―」『旅と伝説』65 号（1933 年）、5-6 頁。
36　とよた時「天狗・仙人妖怪ばなし」『あしなか』227 号（1992 年）、8 頁。
37　C2010312-006 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C2010312-006.shtml
38　C2220006-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C0222006-000.shtml
39　野村純一他『日本伝説体系』3 巻、みずうみ書房、1983 年、111-112 頁。
40　C1510525-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C1510525-000.shtml

刀でとどめを刺したのちに火をかざして見ると、頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎で、鳴き声は鵺に似るという怪物だった[41]。しかし、これが、愛媛県の伝説になると、源頼政の母が鵺に変身してしまう。上浮穴郡中津村に、源頼政の親子が住んでいた。頼政は京で就職し、池に祈りに行った母は鵺となった。頭は猿で、体は龍の如く、そして、尻尾は八本あるという。その鵺が、父二峰村を通った時に息を吹いたから、この村には**霧が生じた**といわれている[42]。

日本語には「霧」「靄」という二つの言葉があるが、霧も靄も、妖怪の存在の前兆だとされる。深山幽谷には天狗がいて「カラキダオシ」をする。天狗の他にも「オンボノヤス」というものがいて、**霧を吹く**ので用心しなければならない[43]。霧は自然に化け物の体から出るが、場合によって、妖怪自らの意志により発生することもある。天正 10 年（1583）、織田軍が武田軍を破るために攻め込んできたとき、台城の下の淵から大蛇が**霧を吐き**、城が**霧に包まれたので**攻めあぐんだ。淵に住む大蛇の仕業だということで、淵に矢を打ち込んで、とうとう大蛇を殺した。その後霧は出なくなり、城はまもなく落ちた。以後、城を大蛇ヶ城という[44]。

ルーマニアのマラムレシュ地方には、夜男（よるおとこ）（オムル・ノプツィー Omul Nopţii）の伝説がある。夜男が出現すると大雨が降って、木が倒れるほど嵐が吹き荒れる。体は大きく、目と足が一つずつしかない。消し炭のように赤い目で周りを見回すと、近くの物は全部燃えてしまう。一本の足で山の頂上まで飛び跳ねることができる。名前のとおり、彼は日没から日の出までの間のみ力があるそうである。

チェルテザ村にイリンカという働き者の少女がいた。イリンカは大変美人だという噂が広がったので、夜男も彼女に会いに行くが、少女は夜男の醜い顔を見て、すぐさま逃げ出してしまう。翌日、イリンカが村に夜男の話をしに行ったところ、今まで見たこともないハンサムな青年に出会い、ひとめぼれする。彼は、夜男を絶対に彼女に近寄らせないようにすると約束するが、しばらくすると、別の所に用事があると言って、村を発ってしまう。イリンカが何カ月待っても戻ってこないまま、二年が過ぎた。そんなある日、イリンカが羊とともに牧場に出かけて遅く帰ると、家に夜男がいた。夜男は、「簡単には殺されないぞ」と言って、ニタッと笑いながら出て行った。すると次の朝、驚いたことに、恋人が突然戻ってくる。イリンカは、今まで相手の名前も知らなかったので、どうしても知りたくなり、尋ねると、彼はグリガと名乗った。しかし、それ以上、家族のことなどについては語ろうとせず、夜男を殺すことをあらためて約束する。

嵐の日、イリンカの前に夜男が再び現われ、結婚を申し込むが、やはり断われる。

---

41 小松和彦監修『日本怪異妖怪大辞典』、426 頁。
42 武田明「父二峰村の民俗記」『ひだびと』83 号（1941 年）、19 頁。
43 蒲生明「妖怪語彙」『民間伝承』5 巻 10 号（1940 年）、8 頁。
44 C2020426-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C2020426-000.shtml

その翌日、グリガに「自分がこの地方で一番強い男なので、夜男の心配は要らない」と言われても、イリンカは何となく不安になる。それから何カ月かが経ち、グリガはイリンカに結婚を申し込む。しかし、イリンカが「夜男が殺されるまで嫁には行かない」と言うのを聞いて、彼は笑い出し、消えてしまう。その笑い声を聞いたイリンカは、微妙に夜男のことを思い出し、ますます不安になる。やがて、日が暮れると、夜男が強盗を連れてイリンカの羊小屋にやってくる。夜男の命令により、イリンカは胸を切られ、木に縛りつけられる。強盗たちはたくさんの羊を殺すと、姿を消した。傷つけられたイリンカはラッパを吹いて、羊小屋の方に村人たちを集める。村人全員で強盗の隠れ家に行くと、殺されたくない強盗たちは代わりに、夜男の力の秘密を教え始める。実は、彼の力は、山の中腹にある岩に隠れているという。その不思議な力によって、夜は夜男になるが、昼間はハンサムな青年に変身する。そして、その力は夜に最も強くなる。強盗が村人たちをその岩まで連れていき、岩を動かそうとした途端、夜男が現れた。夜が明けるまで村人たちは一所懸命闘ったが、結局、夜男を殺したのはイリンカだった。村人らは不思議な力を持つ岩を崩してから、強盗たちを山中に閉じこめるが、ひどい怪我をしたイリンカは死んでしまい、羊小屋に埋められた[45]。この伝説では、夜男はふだん夜に現われるが、ときには天気が崩れた嵐の日に出現することもある。また、怪物の二重性が強調され、人間であるイリンカは、その怪物に対して、引かれる気持ちと嫌悪する気持ちの両方を体験する。

ルーマニアの夜男が夜を擬人化した人物だとすると、日本文化において闇を具体化した妖怪は、おそらく「塗壁（ぬりかべ）」に当たるだろう。夜道を歩いていると、目の前が急に壁になり、前進することができなくなってしまう。横を通り抜けようとしても、壁は果たしなく続いていて、抜けることができない。これは妖怪、塗り壁の仕業である。その体はぶ厚くて、棒で下の方を強く叩くと消え去るという[46]。

ギリシアの神話では、夜は擬人化され、神として崇拝されている。ヘーシオドスの『神統記』では、ニュクス（Nýx、夜の女神）とエレボス（幽冥）はカオスの子どもで、この二人の兄妹の間にヘーメラー（Hemera、昼）とアイテール（Aither、上天の清明な大気）が生まれた。夜が昼や明るさを生むのは、不思議に思われるかもしれないが、ニュクスもヘーメラーも時間の神格化である一方、一日（二十四時間）の流れを象徴している。すなわち、昼は夜に次いでやってくる、という意味である[47]。ニュクスとヘーメラーが昼と夜の表裏一体であるように、エレボスと息子のアイテールも、地下の暗黒と上天の光明という表裏一体をなす。ニュクスもヘー

45 Isidor Râpă. *Balade şi legende maramureşene* [マラムレシュ地方のバラッドと伝説]. Bucharest: Ion Creangă, 1976, pp. 47–63。

46 志村有弘編『日本ミステリアス妖怪・怪異・怪人事典』、75 頁。

47 Robin Hard. *Handbook of Greek Mythology*. London: Routledge, 2003, pp. 23–24.

メラーも、世界の西の果ての地下に館を共有している。ニュクスが世界を巡って夜をもたらしている間、ヘーメラーがそこに待機しているため、二人が共に館にいるのは、昼と夜の境目の一瞬だけである。

ニュクスは単独でも、多数の神々を生んだといわれる。その中にはヒュプノス（Hypnos、眠り）、オネイロス（Oneiros、夢）、ピロテース（Philotes、愛欲）の一族がいて、それぞれが夜間の活動（睡眠、愛欲、夢）を意味している。ちなみに、ヒュプノスの双子はタナトス（Thanatos、死）である。次いで、アパテー（Aphate、欺瞞）、モーモス（Momos、非難）、復讐の女神であるネメシス（Nemesis、義による復讐）、オイジュス（Oizys、苦悩）、エリス（Eris、争いの女神）が生まれた。これらの神々は、人間の実在のうち、マイナスの部分を表わしている。加えて、Philotes（愛欲）は Aphate（欺瞞）と結びついている。運命の女神である三人のモイライ（Moirai）も、ニュクスの娘だとされる。モイライの兄弟である忌まわしいモロス（Moros、死の定業）とケール（Ker、死の運命）は、運命と死の関わりを示している。ニュクスの息子の中には、ゲーラス（Geras、老年）とタナトス（Thanatos、死）もいるという。彼らは人生の終わりを告げる神々である。ヘスペリデス（Hesperides、黄昏の娘たち）は、『神統記』では夜の女神で、ニュクスが一人で生んだ娘たちだとされる。

| 象徴 → | 時間 | 睡眠 | 消極的な感情 | 運命 | 老化、死 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ニュクスの子どもたちの名前 | ● ヘーメラー（昼）<br>● アイテール（上天の清明な大気） | ● ヒュプノス（眠り）<br>● オネイロス（夢）<br>● ピロテース（愛欲） | ● モーモス（非難）<br>● ネメシス（復讐の女神）<br>● オイジュス（苦悩）<br>● アパテー（欺瞞）<br>● エリス（争いの女神） | ● モイライ（運命の女神） | ● ゲーラス（老年）<br>● モロス（死の定業）<br>● ケール（死の運命）<br>● タナトス（死） | ● ヘスペリデス（黄昏の娘たち） |
| 時間（の流れ） | ● 昼光、昼間 | ● 日没から日の出までの時間<br>● 一日の半分（夜の間） | ● 心理と感情 | ● 変化・進化の時間 | ● 人生の後半 | ● 時間を越える（ヘスペリデスの園はヘーラーの果樹園で東にあり、そこには、不死を得られる黄金の林檎の木がある） |
| 意味・解釈 | ● 時間の限定 | ● 夜の活動（睡眠、夢、愛欲） | ● 人間の心理 | ● 運命 | ● 墜落<br>● 老化<br>● 死 | ● 不死（時間の無限） |
| この神が影響を与える人物 | ● 神と人間 | ● 神と人間 | ● 人間（と神） | ● 人間 | ● 人間 | |

表 2

エレボスは、原初の闇を神格化した神で、しばしばタルタロスと混同される。名前は「地下世界」を意味する。ニュクスは闇の時間（夜）を、エレボスは闇の空間（タルタロス）を指している。ただし、ニュクスの子どもは、睡眠・消極的な感情・運命・老化・死という、夜の特徴を示している。ニュクスは元々、短い時間（12時間）の責任を負っていたが、モイライ（運命）を生み出した結果、ゲーラス（老年）、モロス（死の定業）、ケール（死の運命）、タナトス（死）を通じて長い時間（人生）も担当するようになり、さらに、ヘスペリデスを出産した結果、時間の限界を超えてしまう。神格化された夜は自分の子どもによって、神の世界をはじめとし、人界にまで影響を与えることができる。つまり、睡眠・夢・愛欲というのは、神も人間も経験するけれど、老化や死は人間しか体験できないものだとされる。ニュクスの子どもは時間の範囲から離れていくにつれて、人間の心の中の世界（心理）に進入していく。他方、ニュクスの子どもたちが引き起こす気持ちは、ほとんどマイナスの感情（非難・復讐・苦悩・欺瞞）に限られている。

心理学には、積極的（建設的）な感情と同様、消極的（破壊的）な感情も存在する。消極的な感情（恐怖・嫉妬・憎悪・恨み・貪欲・迷信・怒りなど）は、放っておいても自由に潜在意識に入ってくる。幽霊はそういった感情によって、いまだこの世に結びついているそうである。伝説でもこの心理的な側面が強調されている。幽霊は胸の内にある。胸の内が明らかなときは出ない。**暗い胸の内から出る**のである[48]。

ときに、闇・霧・雲は、傷つけられた動物たち（化け物）の心理的な反応（自己防衛）だとされる。ある日、二人の猟師が本沢にやってきた。岸の茂みに大蛇がおり、怖がる若い猟師は年上の猟師の制止にもかかわらず、鉄砲で大蛇の頭を撃つ。ところが、大蛇は死なず、淵に飛び込んで見えなくなった。覗き込んでみると影も形もなく、やがて淵の中からはもうもうと霧が立ち昇り、真っ黒な雲が空を覆い始める。その日から三日間、大豪雨となり、近辺の村に大きな被害を出すと、五日目になってようやく晴れた。村人の中には蛇が流れ下っていくのを見た者がおり、きっと、赤沼の池の主が池と一緒に流れ下ったものだろう、と言い合った[49]。

攻撃された狐もまた、闇の中に隠れている。ある人が、道の横に古狐を見つけ、石を投げて殺そうとすると、急に真っ暗闇になってしまった。どうしても家に帰れなくなり、枯草を焚いたらいくらかは明るくなったので、やっと帰ることができたという[50]。

妖怪や化け物は、約束を守らなかった人間に対して怒り、黒雲などを起こす。雲は、彼らの怒りが形をとったものに過ぎない。あるとき、与五郎の夢枕に鯨が出て

---

48　堤邦彦「怪異との共棲―江戸時代人は何を怖れたか―」『伝承文学研究』50号（2000年）、3頁。
49　C2010339-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C2010339-000.shtml
50　有賀恭一「信州諏訪湖畔の狐」『郷土研究』7巻2号（1933年）、23-24頁。

きて、出産のために沖に行くので捕獲しないでほしいと懇願した。しかし、漁師たちは海に出て、鯨を捕まえようとする。その時、**突然暗い雲**が出てきて風が押し寄せ、船を沈ませた。これは、子持ち鯨の願いを聞かなかったからだといわれ、与五郎は鯨碑を建て、死ぬまで念仏し続けたという[51]。

秘密を打ち明けた船頭が、化け猫に罰せられた話もある。お婆さんがかわいがっていた老猫が姿を消し、美しい娘が現われて、自分は三毛だと言う。それから間もなく、江戸深川に「おけさ」と名乗る遊女が現われ、その唄が「おけさ節」としてたいへん流行する。ある夜、おけさの元へ船頭が遊びに来て、遊女姿の大きな猫が、残った魚の骨を食い荒らしているのを見る。船頭は口止めされるが、翌朝には話してしまう。そこへ突然、大きな**黒雲**が湧き、その上に大きな化け猫が乗って、船を襲い、船頭を空へ巻き上げたかと思うと、雲の中へ姿を消してしまった[52]。

きちんと祀られていない天狗の怒りも、黒雲となってしまう。腕のいい川狩り人夫がいた。ある大仕事をひかえた日、天狗様にお神酒も供えず、悪口を言っていた。仕事中、にわかに**黒雲が出**てきて、雷鳴がとどろき、山ほどの大きさの岩が人夫の上に飛んできた。材木は岩の下に埋まり、若者もいなくなった。天狗の仕返しといわれた[53]。そういった消極的な怒りの表出は、性格・正体とは違い、目に余る不公平な出来事に対してその場で反応する感情である。

美術用語でいえば、「印象主義」（外部）と「表現主義」（内部）の二つの闇が存在する。印象主義の闇は、外界を中心にして、事物から受けた感覚が人の心にまで染み込む。すなわち、外界が内面に移る（外の世界を感情や印象に変える）。そこには、遠近感のあるビジュアル性が見られる。印象主義の闇には自然の闇も含まれていて、さらに、時間的な闇（夜）、空間的な闇（森、木が茂る所、暗い道、井戸、洞穴など）、気象学上の闇（黒雲や霧）にも言及する。例えば、天狗やツルベ落としのような妖怪は、暗い森の中に棲む。また、空間的な闇は、地下の国への旅や深い海底への旅（龍宮城）とも関連づけられている。時間的な闇（夜）に現われる妖怪たちは、泥田坊、枕小僧、垢嘗、ろくろ首などである。アンタイオスの体力が地と結ばれていたように、妖怪たちの力も闇にいる限り、無限に復活するだろう。

印象主義の闇が外界に存在する一方で、表現主義（内部）の闇は、精神や心理と結びついている。言い換えれば、表現主義の闇は感情を外界に反映させる傾向がある。与五郎の夢枕に出て警告した鯨は怒って、黒い雲を引き起こした。同じく、傷つけられた大蛇も霧を立たせた。このように、妖怪や化け物の自己防衛本能や怒りなどがすべて外へ投影されると、闇となる。そういった表現主義の闇は、ある物事

51 松崎憲三「鯨鯢供養の地域的展開―捕鯨地域を中心に―」『日本常民文化紀要』20号（1999年）、54–55頁。

52 C1510512-000 http://www.nichibun.ac.jp/YoukaiCard/C1510512-000.shtml

53 小林茂「天狗の岩」『秩父民俗』1号（1968年）、40–43頁。

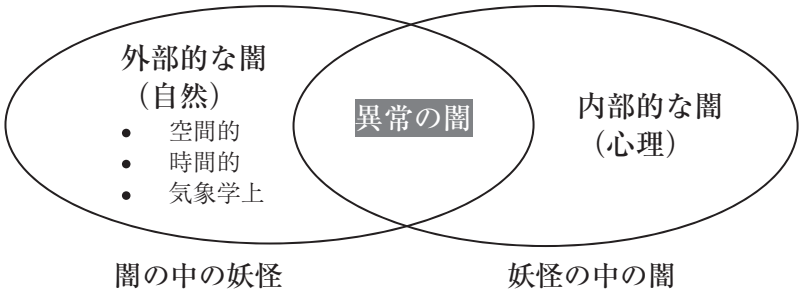


図 1

に反応して発生するもので、妖怪の正体や性格とは関係ない。

外部的な闇と内部的な闇の間には、「異常の闇」が挟まれている。この異常の闇とは、自然の理に反する不思議な闇で、妖怪の体から出る。鵺がいる場所の上には黒雲が留まり、手長足長は雲を集める力がある。旅僧に扮した蟹は、黒雲と霧を作っていた。弥三郎婆は、黒雲に乗って逃げる。このような黒雲や霧は一見、気象現象のようだが、実際には、妖怪や化け物が生み出すモノに当たる。ベスト・セラーになった『氷と炎の歌』シリーズにも異常の闇が見事に描かれているので、その言葉で終わらせたいと思う。

「異人は寒い時に来ると、殆どの物語がそう語る。あるいは、彼らが来る時に寒くなるだろう。時々彼らはふぶきに登場し、空が晴れると姿を消す。日の光が嫌いなので、夜に出る・・・それとも彼らが出現すると、夜のように暗くなるだろう[54]」「昼間や、日が輝いているうちには現れないが、亡くなったという訳ではない。影は、絶対になくならない。その姿は目に見えないかもしれないが、知らずにかかと（足）にくっついてくる[55]」。

[54] George R. R. Martin. *A Feast for Crows*. Bantam Dell (Random House), 2005, p. 80.（訳は引用者による）

[55] George R. R. Martin. *A Dance with Dragons*. Bantam Dell (Random House), 2011, pp. 783–89.（訳は引用者による）